

第10回  
「優秀会社史賞」選考報告書

1996年11月8日

「優秀会社史賞」選考委員会

「優秀会社史賞」選考委員会事務局

財団法人 日本経営史研究所

〒102 千代田区平河町2-12-4 (ふじビル3F)

TEL 03-3262-1090 FAX 03-3239-5090

(無断転載を禁じます)

頒価 1,000円

## 目 次

第10回「優秀会社史賞」選考委員会 .....	1
第10回「優秀会社史賞」候補作品 .....	2
第10回「優秀会社史賞」入賞作品 .....	3
第10回「優秀会社史賞」選考報告 .....	5
入賞作品選評 .....	11
候補作品選評 .....	25
「優秀会社史賞」(第1回～第10回)入賞作品 .....	49

第10回 (1996年) 「優秀会社史賞」 選考委員会

(敬称略, 50音順)

委員長	豊橋創造大学教授 経営史学会会長	森川英正
委員	東京大学社会科学研究所教授	橘川武郎
	京都産業大学経営学部教授	柴孝夫
	東京大学経済学部教授	大東英祐
	東京経済大学経営学部助教授	中村青志
	東京大学社会科学研究所教授	橋本寿朗
	青山学院大学経営学部教授	長谷川信
	大阪大学経済学部教授	宮本又郎
	埼玉大学経済学部教授	山崎広明
	神戸大学経済経営研究所教授	吉原英樹

---

主催 財団法人 日本経営史研究所

協賛 財団法人 経済広報センター

---

事務局 財団法人 日本経営史研究所

## 第10回「優秀会社史賞」候補作品

(会社名, 50音順)

『朝日新聞社史 明治編』 『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』 『朝日新聞社史 昭和戦後編』 『朝日新聞社史 資料編』	朝日新聞社
『大関二百八十年史』	大関株式会社
『紀陽銀行100年史 本編』 『紀陽銀行100年史 資料編』	株式会社紀陽銀行
『呉羽化学五十年史』	呉羽化学工業株式会社
『サッポロビール120年史』	サッポロビール株式会社
『住友海上火災保険株式会社百年史』	住友海上火災保険株式会社
『西部石油三十年史』	西部石油株式会社
『大気社80年史 環境づくりの記録』 『環境づくりの記録 大気社の80年、そして未来へ』(写真集)	株式会社大気社
『ダイキン工業70年史』	ダイキン工業株式会社
『中部地方電気事業史』上巻 『中部地方電気事業史』下巻	中部電力株式会社
『名古屋鉄道百年史』	名古屋鉄道株式会社
『日本ガイシ75年史』	日本ガイシ株式会社
『日本火災海上保険株式会社百年史』	日本火災海上保険株式会社
『フジサワ100年史』	藤沢薬品工業株式会社
『三井海上火災保険株式会社七十五年史』	三井海上火災保険株式会社
『レンゴー株式会社八十年史 1909～1989』	レンゴー株式会社

## 第10回「優秀会社史賞」入賞作品

(会社名, 50音順)

### 優秀会社史賞

『呉羽化学五十年史』	呉羽化学工業株式会社
『サッポロビール120年史』	サッポロビール株式会社
『住友海上火災保険株式会社百年史』	住友海上火災保険株式会社
『大気社80年史 環境づくりの記録』 『環境づくりの記録 大気社の80年、そして未来へ』(写真集)	株式会社大気社
『中部地方電気事業史』上巻 『中部地方電気事業史』下巻	中部電力株式会社

### 優秀会社史賞 特別賞

『朝日新聞社史 明治編』 『朝日新聞社史 大正・昭和戦前編』 『朝日新聞社史 昭和戦後編』 『朝日新聞社史 資料編』	朝日新聞社
---	-------

## 第10回「優秀会社史賞」選考報告

1. 選考の経過

2. 総 評

## 1. 選考の経過

第10回「優秀会社史賞」選考の対象とした会社史は、1994、95両年度中に刊行され、財団法人日本経営史研究所経営史料センターにおいて収集することのできたものである。ただし、前回の選考対象期間中に刊行されたもので、今回はじめて入手したものも一部含まれている。

会社史の収集は、専門図書館協議会関東地区協議会と経営史研究所とが共同編集している「会社史・経済団体史総合目録」追録（年2回発行）によっておこなった。今回の選考にあたって収集することができた会社史は、別冊となっている資料編あるいはシリーズものなどセットとみなしうるものを1点として数え、230点であった。

選考にあたっては、まず第1次選考を、経営史・経済史を専攻する若手研究者と日本経営史研究所のスタッフによっておこなった。選考委員は次の方々をお願いした。

- 飯田 隆（東京外国語大学外国語学部助教授）
- 老川 慶喜（立教大学経済学部教授）
- 後藤 伸（神奈川大学経営学部助教授）
- 佐々木 聡（静岡県立大学経営情報学部助教授）
- 田付 茉莉子（恵泉女学園大学人文学部教授・(財)日本経営史研究所）

第1次選考は、1996年6月から7月にかけておこない、15点前後を選出することとして選考を進め、本選考にかけるべき作品を選び、問題となった意見を付して選考委員会に提出した。

第1回選考委員会は7月16日（火）に開催され、第1次選考の報告を受けて協議の結果、別掲16点を候補作品と決定した。

選考方法は、各候補作品ごとに3～4名の委員がこれを精読することとし、それぞれの候補作品について精読担当者を定め、うち1名を選評責任者とした。そして、9月23日（月）に第2回選考委員会を開催し、6時間余りの論議を経て入賞作品を決定した。

なお、第1次選考で注目を集めながらも、惜しくも枠内に入れることができなかった作品に、『鳥取銀行の歩み』『安田倉庫七十五年史』『九電工50年史』『野崎産業100年史』『雪印乳業史』（第6巻）などがあった。

## 2. 総 評

「優秀会社史賞」の選考も今年で10回目を迎える。早いものだ。しかし、この20年間の会社史の進歩は、質・量ともに著しいものがある。この「会社史賞」も、それに幾分かの役割を果たしていることと信じている。決して我田引水ではない。また「優秀会社史賞」選考委員会の委員長を私がお引き受けすること、これで3回目である。第10回「優秀会社史賞」という大切な節目に委員長としてお役に立ててうれしい。「選考経過」にもあるとおり、「優秀会社史賞」の選考は、第1次と第2次に分けて行われた。第1次選考が対象とした「会社史」は230点であった。その中から16点が第2次選考の候補作品として選ばれた。

16点の候補作品を産業別に分類すると、損保3、アルコール飲料2、機械、設備工事、化学、陶器、紙器、製薬、石油、電力、運輸、新聞、銀行各1で、大変分散した。アルコール飲料も日本酒とビールに分かれるから、損保3社の集中度が目立つことになった。

歴史の長さで分類すると、『大関』の280年史を別格として、100年以上が『朝日新聞』『紀陽銀行』『サッポロビール』『住友海上火災』『中部地方電気事業史』『名古屋鉄道』『日本火災海上』『フジサワ』と、8社（中部地方電気事業史の場合は会社ではないが）である。『大関』も加えると、候補作品の過半数の9社が100年以上の歴史を対象としていることになる。残りの7社のうち70年以上が5社であるから、歴史の古い会社の社史のウエイトが高かったといえよう。『呉羽化学』の50年史、『西部石油』の30年史は、今回少数派に属するものであった。

16の候補作品に対して選考委員は10名であるので、1名の委員が5作品を担当し、1作品を3名の委員が読むことになった。そして、損保会社の社史が3点あるので、その全点を読んで比較対照する委員を別に1名定めた。

選考委員会は、9月23日に最終の会合を開き、各委員から持ち寄られた精読の結果をもとに長時間審議を行い、別記のとおり、6点を「優秀会社史賞」に選ん

だ。うち、本賞は5点、特別賞は1点である。

激しく対立したというのではないが、委員の意見が分かれた作品は何点があった。しかし、授賞の当否をめぐる議論は3点であった。他には『朝日新聞』社史で、本賞にするか、特別賞にするかをめぐって議論された。

委員の間の選考基準は、大体において毎年変わらない。①社内史料の公開度、②歴史のプロセスの的確な記述・説明、③読みやすさ、読者をひき込む魅力と工夫——というところである。今回も、これらの基準をパスした作品が受賞したといえることができる。ただ1つ、今回の場合、構成にどれだけの工夫をこらしたかが、とくに問題となった。最近、社史の編別構成がワンパターン化して、まるで判を押したようになっていられるからである。キレイゴトを並べたり、トップ経営者が神様扱いされたり、遠い過去の時期については史料をふんだんに公開するのに、最近時になると史料を出し惜しみ、当たりさわりのない記述に終始したりという、いつも問題になる傾向は、残念ながら今回も見られた。

今回、とくに感じられたのは、限られたページ数に、会社側が公開を許容し得ることがらを何でもかでも書き込もうとし、その結果、一つひとつのことがらに関する記述がページ足らず、舌足らずになってしまう例が少なくないことであった。会社の歴史は長いから何でも書けるはずがない。これだけは書いておきたいという重点的対象の選定と、それに適した系統的構成の必要性を強く感じた。

私の意見を言えば、会社が一定の史的環境のもとで立てた目標とその目標を達成するために遂行した事業の大筋を骨太に書き込み、さらにそれらの事象に関連してとった経営行動に絞って記述するというスタイルが必要だと思う。業務の大筋がしっかり書いてあれば、細部は省略しても不満は残らないし、可能なら、たとえば経理、人事労務、管理機構などの業務については「資料編」としてまとめればよいのである。とにかく、何でもかでも書こうとしたために断片的な記述の寄せ集めになってしまった、まるで“幕の内弁当”のような社史が最近目につく。

「優秀会社史賞」の目的は、優れた会社史の刊行を促進するところにある。では、会社はなぜ社史を刊行するのか。業界における会社の威信、PR効果、史料の保

25  
27  
28  
36  
284  
227

存など、理由はいろいろあるが、最大の理由の1つは、社員教育のための教材づくり求められるであろう。それが成功することによって、社史は「企業戦力」になり得る。

一般に、日本の会社員の歴史離れは著しい。学校での低調な歴史教育、受験勉強中の歴史知識の詰め込みの反動などであろうか。「(自分の会社の)社史なんて読んだこともない」と言っただけの社員が多い。歴史離れの結果である。しかし、もう1つの原因は、読ませる工夫のない砂を噛むような社史や、内部の事実をまともに公開しないキレイゴトの社史が多いところにある。

人間、苦境に立った時、自分の過去の生き方や両親の苦勞の跡に思いをいたす。その中から、直面した苦境を乗り越える方策を考え出そうとする。会社でも、会社員でも、話は同じである。「あの危機の中で先輩たちはいかに苦しみ悩んだか。いかにして活路を見出したか」を必死に考える。——考えないような会社はもうダメである。先輩の苦闘の跡づけをしてくれるのが会社史である。そのような会社史がたくさん出てほしい。そのような会社史を社員たちは読んでほしい。

「私は、別に憂国の士ではありませんが、日本もこの繁榮はそう長くは続くまいと思うようになりました。経済も地震学でいう土壌の液状化みたいになってきて、“兜町主義”になっています。産業も今がピークかもしれない」と故司馬遼太郎氏が語ったのは、1990年3月であった。まさにバブルの絶頂期で、傲れる会社員たちの歴史離れが急速に進んでいた。私の経験でも、若い会社員を対象としたセミナーで、明治維新と福沢諭吉の話をした時、「実務に関係のない話はやめろ」と野次が飛び、聴衆から哄笑が起こったのはそのころの出来事である。それから半年後、バブルがはじけた。バブルがはじけた後の今日、日本の会社員はかつての傲りはどこへやら、すっかり自信を喪失してしまった。起業家精神だのベンチャーだの、調子よくあおる学者評論家は多いけれども、そう簡単に元気は出るものではない。こういう時こそ、歴史に学んでください、社史を読んでください、というのが私の願いである。そのためにも、優れた社史が数多く刊行されてほしいと思うのである。

(森川英正)

## 入賞作品選評

呉羽化学五十年史

サッポロビール120年史

住友海上火災保険株式会社百年史

大気社80年史 環境づくりの記録

中部地方電気事業史

朝日新聞社史

『呉羽化学五十年史』

財団法人日本経営史研究所編集 呉羽化学工業株式会社発行  
1995年4月 511p 27cm

本社史は、よくできた社史である。本社史の優れている1つの特徴は、意思決定のプロセスが詳細に記述されていることである。その例として塩化ビニリデンの研究開発活動の記述をあげることができる。技術開発の状況、製品として繊維を狙うか、非繊維を狙うかなど製品化の動き、ダウ・ケミカル社との交渉のプロセス、同社との交渉が不調に終わってからの呉羽化学による独自の技術開発の試みなどのプロセスが、具体的に詳細に記述されている。

本社史は、本文が460ページの、社史としては比較的コンパクトなものである。ところが、今みた塩化ビニリデンの研究開発の記述のように重要な事柄については思いきって多くのページをさいて、具体的に詳細に意思決定のプロセスを記述している。重点主義のメリハリの効果が社史を立体的なものにして、読むものに強い印象を与えるようになっている。

呉羽化学のような企業が長期に成長を続けていくためには、継続的に新製品を投入しなければならない。そして、売上高の一定割合以上を新製品で占める状態を続けなければならない。このような観点から、本社史の執筆者たちは、全製品を旧製品と新製品に分けて、各年度においてそれぞれがどのような売上高の構成比になっているかを示している。

本社史の執筆者たちは、新製品開発、経営多角化、企業のリストラクチャリングなどの経営の研究成果をもとにしながら、それらを生のかたちでは表面に出さず、分析的な視点として背後に置きながら、本文の記述とその記述のためのデータの表示の中に具体的に生かしている。

本社史には事故など、具合の悪いことも記述されている。その1つの例としては、1971年と73年の2回起こった塩素漏洩事故である。また、自社の製品が競争企業の製品に比べて品質の面で劣っている点も隠さずに記述されている。例えば、

1960年代の前半の時期には、呉羽化学のクレハロン樹脂は品質の点で旭ダウのサランに大きく遅れていたことなどである。

それとも関連して、サクセスストーリーがほとんどないことを指摘することができる。呉羽化学の50年の歴史の中で、荒木三郎は長期間、社長と会長を務めた。その荒木の経営手腕について、高く評価される点についての記述はいくつかあるが、それがいわゆるサクセスストーリーにはなっていない。

本社史は、社史としては比較的コンパクトな書物であるが、多くの項目を羅列的に平板的に記述するのではなくて、重要な事項については多くのページを割いて、具体的かつ詳細にプロセスを記述する重点主義がとられている。また、「社内報」などに掲載されていた談話や思い出の記、エピソードなどが本文あるいは脚注にいくつかあるが、それらは興味深く生き生きしており、単調さを救う効果を発揮している。文章はアカデミックすぎず、またジャーナリストックすぎず、ほどよい中間の文体である。平易明快な表現で読みやすい。

本社史にも問題点がないわけではない。本文中のデータには充実したものが多くある。これに比べると資料編のデータは、量・質ともに不十分で、もっと充実したものがほしかった。

最近の十数年については、歴史的な評価になじまないとの理由で序章をもうけ、そこで扱われている。この序章は本文に比較すると、性格がかなり違ううえ、内容的にも本文ほどの充実度がみられないのは残念である。

(吉原英樹)

## 優秀会社史賞

### 『サッポロビール120年史』

サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編集  
サッポロビール株式会社発行  
1996年3月 1009p 27cm 索引あり

大変に出来映えの良い社史である。巻頭の「刊行のことば」では「潤色を避け、あくまで事実を正確に伝えることを旨とし「日本産業史に学ぶ方々にとっても客観性のある社史たり得るものとひそかに自負」しているとの自信が披瀝されているが、その言葉に偽りはない。楽しく読ませながら、学ぶところ大きい第一級の社史である。

本書は、わが国におけるビールの消費と醸造の事始めを江戸時代から書き起こした序編と本史部分の7編、それに広告宣伝編と資料編を加えて成り立っている。前半は戦前部分で、第1～2編ではサッポロビールの2つの源流、すなわち開拓使麦酒醸造所（1876年）と日本麦酒（1887年）の創業事情とその後の発展過程を、第3編では、札幌麦酒・日本麦酒・大阪麦酒の3社合同により成立した大日本麦酒（1906年）を扱っている。第4編は大日本麦酒が分割されて日本麦酒㈱（1949年）が成立した経過とその経営を、第5編以下は、サッポロビールと社名が変更された以後（1964年）の時代を3つの時期に区分して、叙述している。

本書が「優秀会社史賞」に該当するとして、評価されたのは次の諸点である。①まず、創業事情の記述が優れている。国産ビールを商品化するプロセスにおいて起業家や中川清兵衛ら日本人技術者たちが、資本の調達、外国の技術の導入・消化、麦やホップ、ビール瓶の調達、輸送や販売問題などを解決するにおいてどのような辛酸をなめたか、具体的な挿話をまじえながら活写されている。建業の熱気が伝わり感銘を受けるが、学術的にも外来産業の移植過程の参考事例としてインフォーマティブである。②業界中における同社の位置を明らかにするという編纂方針があったのであろう。キリン、アサヒ、サントリーはもちろん、かつて存在したビール会社のほとんどすべてに相応の言及があり、またビール行政や酒税についても要を得た説明がある。この一冊で、ビール産業史についてかなりのことが学べるといえよう。③メーカーの社史であるから、製造技術、設備、原材料問題、マーケティング、労務、研究開発などが記述の中心となるが、これら

の諸側面についてまずは偏りなく書いている。技術史的説明は往々にして難しいものになりがちだが、素人にもわかりやすい。④経営戦略や経営成果を他社との比較で検討していることは高く評価できる。これは、同社にとって都合の悪い点や経営上の失敗も、比較的率直に書いているということでもある。例えば、戦後「ニッポンビール」ブランドを採用したことの問題、料飲店中心という同社のマーケティングの弱点、飲料水市場における苦戦、アサヒ・スーパードライの衝撃、「びん生」から「ドラフト」へのブランド切り替えの失敗などについての記述である。こうした点についての率直な記述があるだけに、逆に、同社の成功については素直に読むことができる。⑤執筆には社外のライターがあたったということだが、大変読みやすく、楽しく仕上がっている。人物小伝や写真、工場レイアウト、イラストなどの挿入、技術関係などについての詳しい注記は、深い興味をもつ読者に有用である。広告宣伝編のポスター写真、広告コピーも楽しい。資料編は、全ビール会社の沿革系統図や酒税、ビール価格なども含まれ、便利である。社外ライターと社内編纂スタッフの緊密な協力のあとがうかがえる。

惜しまれる点がないわけではない。①資料・文献収集に苦労したあとがよくうかがえるが、それだけに、もう少し丁寧に典拠資料・文献の引用注を付けるべきではなかったか。将来における社史再編纂のため、読者のさらなる研究を助けるためである。②戦前編では株主、資本的背景の記述が詳しいが、戦後編ではほとんどない。戦後はサイレント・オーナーたる機関投資家が大株主で資本関係は意義を減じたということであろうか。また金融、銀行との関係などについてはほとんど記述されていない。設備投資資金の源泉ということで、気になる点である。③チャンネル政策やマーチャンダイジングの点では話は詳しいが、営業第一線の活動という意味でのマーケティングについては具体的記述が乏しいように見受けられた。傾向的シェア低下という事態とこれが関係あったのか、なかったのか知りたいところである。④最後は望蜀。本書で書かれている他社との競争は、やはり「規制産業内における競争」であろう。キリンがガリバーになろうと、スーパードライ・ショックがあろうと、それらが他企業に与える影響は非規制産業におけるそれとかなり違うのではないかとの印象を受けた。こうした環境条件のもとで形成されてきた経営体質が、ディスカウント・ストアや輸入ビールの参入などという環境変化のなかで、近い将来どのような問題を突きつけられることになろうとしているのか、こうした目で、日本のビール産業史を回顧する姿勢が前面に出ていれば、本書の現代的意義はさらに増したであろう。（宮本又郎）

---

## 優秀会社史賞

---

### 『住友海上火災保険株式会社百年史』

財団法人日本経営史研究所編集

住友海上火災保険株式会社発行

1995年1月 1004p 27cm 索引あり

---

本書の最大のメリットは、文字通り本格的な社史だという点に求めることができる。それは、以下の諸特徴から明らかである。

まず、きちんとした時期区分にもとづき、しっかりした編別構成がなされている。第2次世界大戦以前は経営環境の変化により、戦後は企業戦略の転換をふまえて、各章が区分されている。

次に、各章の叙述に統一性がある。経営環境、戦略と組織、事業展開、資産運用と業績という順に、安定的な記述が展開されている。

また、全体として考証が行き届いている。それを可能にしたのは、執筆者たちの分析能力の深さと一次資料の活用とであろう。

総じて分析的な叙述が展開されている中で、とくに光が当てられているのは経営戦略のあり方である。

第9章の「世界一」、第12章の「イノベーション」という用語は、章タイトルの表現としては違和感が残るが、それでも各章ごとに、経営戦略とその帰結が明快に記されていることは確かである。

さらに、資料や年表、索引が充実している。

そして最後に、特筆すべき点であるが、同業他社との競争がきちんと書き込まれている。損保業界の場合には、保険商品ごとのシェアとランキングに関するデータが入手しやすいという事情があるようであるが、それでもシェアやランキングの変動が生じた要因にまで立ち入った記述が展開されていることの意味は大きい。

一方で、本書に対して選考委員の間から、いくつかの注文がついたことも事実である。おもなものを列記すると、次のようになる。

- ①『三井海上火災保険株式会社七十五年史』や既刊の『東京海上火災保険株式会社百年史』に比べて、資産運用に関する記述が不十分である。
- ② 他の損保の社史に対しても言えることであるが、査定についての記述が弱い。
- ③ 子会社である摂津海上が親会社である大阪海上から再保険を引き受けたことの意味（第4章）、損保事業に進出した際の住友サイドの企図（第4章～第5章）、第2次大戦後、住友系企業が株主として復活した経緯（第7章）、などがよくわからない。
- ④ バブル関連の記述が不十分である。

最後に、充実した内容の本書を通読しても、やや面白味に欠ける印象が残ったことを付け加えておこう。これは、損害保険業が強い規制のもとにおかれてきたことを考え合わせると、いたしかたのない点なのかもしれない。しかし、例えば日本社会におけるリスクのあり方の変遷をもっと前面に押し出し、火災・海難事故・交通事故などの社会史を、より積極的に記述していたとすれば、本書の面白味は増大したような気がする。

なお、今回の「優秀会社史賞」の選考過程では、本書（『住友海上火災保険株式会社百年史』）のほかにも、『三井海上火災保険株式会社七十五年史』と『日本火災海上保険株式会社百年史』が最終的な候補作品に残り、“損保社史の当たり年”ともいうべき状況が現出した。こうなると自然、3社の社史を見比べるということになるが、いずれにも一長一短があって、選考委員の間でも完全に意見の一致をみたわけではなかったが、総合的に上記のメリットを評価して、本書を「優秀会社史賞」受賞作品に選定した。

（橋川武郎）

---

## 優秀会社史賞

---

### 『大気社80年史 環境づくりの記録』同『写真集』

大気社社史編纂委員会編纂 株式会社大気社発行  
1994年10月 629p, 191p 27cm 索引あり

---

環境設備システムを供給する大気社の創業以来80年の正史であり、読みごたえのある本格的な社史である。大気社は、創業者の上西威が1913年に合資会社建材社を創立して以来、建築材料、暖房設備の輸入業務から始まって、産業用空調、ビル空調、塗装設備への事業展開をおこない、1973年に現社名に変更した。本書は、これらの事業展開を中心に、技術開発、営業、組織と経営管理などを主要項目として、1993年までを対象に記述されている。

本書の優れた特徴として次の3つを指摘できる。それは第1に、事業展開と社員の活動との関わりを、個人名を挙げて具体的に記述していることである。この点はとくに、創業から第2次大戦後にかけての記述に当てはまる。例えば、当初出遅れた産業空調分野への進出については、大阪出張所の強化が、具体的な人材の役割を含めて取り上げられ、紡績空調市場での挽回に成功した要因として、技術職の出張所員の活動による顧客との信頼関係が指摘される。『回顧要録』という資料の存在が大きかったと推測されるが、一方で、編纂者、執筆者の努力と英断を高く評価すべきであろう。

第2に、受注工事または技術開発の事例が豊富に挙げられている。単なる設備の供給者からシステム技術の供給者に変化していった同社が、どのように受注を獲得し、また必要な技術をどのように開発（または導入）していったのかは、重要なポイントであろう。例えば同社は、塗装技術では世界一のアメリカのギッフエルス社からの技術導入によって設計された東洋工業の塗装設備工事を1959年に受注した。同社は、この工事で数々の失敗を繰り返しつつ基礎理論の重要性を痛感させられたといわれる。先端技術を取り入れた工場設備を受注することによって、技術を習得するパターンがあったことを知ることができる。技術開発の担当者個人名を含めて、具体的な記述がなされていることは評価できる。

第3に、事業活動、研究開発などについて、それらのプロセスと成果が、失敗の場合をふくめて記述されていることである。例えば、海外プロジェクトの事例として、アラブ首長国連邦の病院空調設備などの受注は、完成まで約8年間に及ぶ経緯が詳細に記録され、反省点もまとめられている。

また、巻末の資料編は必要資料が適切に収録され、見やすく編集されており、技術の年表もわかりやすい。

以上のように、本書は充実した内容であるといえるが、さらに記述の充実を望むとすれば以下の2点を挙げるができる。

第1に、業界の競争または競争の変化について、すべての時期、業種を通じてある程度の情報がほしい。詳しい記述がある戦前期と同様に、戦後についても塗装設備業界と同程度の記述が、産業空調、ビル空調などについて充実されるべきではないだろうか。

第2に、技術開発の歴史を、システム技術の発展という側面により重点をおいて記述できないであろうか。同社は、単なる設備の供給者からシステム技術の供給者に変化してきた。例えば、塗装設備については、1971年から海外プラントのためレイアウト、基本設計の準備を行ったことが、その後の国内自動車メーカーの工場建設で基本設計、レイアウトを担当するようになるきっかけだったとの記述がある。その他の事業についても、システム技術の範囲がどのように変化したのかは興味深いところである。

(長谷川 信)

『中部地方電気事業史』上巻・下巻

中部電力電気事業史編纂委員会編集 中部電力株式会社発行  
1995年3月 452p, 433p 29cm 索引あり

中部電力は、『中部電力10年史』（昭和36年）以降、10年ごとに経営活動の記録として社史を刊行してきた。今回刊行された『中部地方電気事業史』は、中部電力としての活動の期間にとどまらず、明治22年に同社の前身企業である名古屋電灯が開業して以来の今日に至る中部地方（愛知、静岡、三重、岐阜、長野の5県）の電気事業100年の歩みをまとめたものである。類書としては、中国電力から『中国地方電気事業史』（昭和49年）や関西電力から『関西地方電気事業百年史』（昭和62年）などが出されており、こうした事業活動の推移の結果を社会に伝える社史刊行の企画が相次ぐことは、電力会社の公益事業としての社会的責任の意識を反映したものといえよう。

名古屋電灯は合併によりしだいに供給区域を広げ、大正10年に関西水力電気との合併で関西電気となり、翌年には九州電灯鉄道と合併して東邦電力と改称、5大電力（他に東京電灯、宇治川電気、大同電力、日本電力）の一角を形成した。その後、戦時期に向かって電気事業は国家管理の時代に移行し、昭和14年に日本発送電が設立、17年には全国の配電事業が9つの地域に分けられ、中部地方では中部配電が発足し、東邦電力は解散した。第2次大戦後、わが国の電気事業は占領軍の指令下に再編成され、9電力会社体制で出発し、中部地区では中部電力が新たに発足した。100年間に、中部地方には延べ300を超える電灯・電力会社が誕生したが、それらが合併により、中部電力へ統合されていったことになる。

100年の大きな流れを跡づけることをねらいとする本書は、上下2巻（各巻とも5章構成）からなる。上巻では、中部電力設立以前の時期の中部地方電気事業史、すなわち名古屋電灯の創設から敗戦後の電気事業再編成までの過程が対象とされている。下巻は、昭和26年の中部電力発足から平成3年までの同社社史の構成となっている。また、本書は経済史ないし経営史を専門とする6名の研究者の

手で執筆されている。そのため、とりわけ上巻の内容的密度は濃く、多数の緻密な図表が駆使されるとともに詳細な脚注も付され、日本の電力産業史全体を展望する問題意識で執筆がなされており、社史というよりもむしろ高度な学術的研究書のレベルの記述内容である。戦前期についていえば、今後これ以上の内容的水準の電力会社社史の刊行は至難であろうと思われる秀作である。

ただし、研究者の分担執筆であるため、上巻では、担当の章ごとに視点や力点の置き方に差異が生じている面もみられる。たとえば、第1章「電気事業の形成（～大正9年）」では、名古屋電灯の創業と発展以外に、中部5県の電灯・電力事業の形成を小規模な企業の設立に至るまで漏れなく丹念に追いながら分析しており、明治後期から大正前期にかけては、中部地方では名古屋電灯が最大規模の企業であるものの、群小の電気事業が各地に割拠していたと指摘している。ところが、第2章の「競争と『科学的経営』（大正10年～昭和6年）」と第3章の「協調と自主統制（昭和7～13年）」では、東邦電力を中心に見た5大電力体制論の視点の記述に急転換するため、地域史的視点が急に希薄になり、第1章から読み進むと、若干の戸惑い感も禁じえない。地域史的視点から見た割拠性から集中合同への移行の論理が、章間の谷間に埋没してしまったともいえよう。2章と3章が本書中の最も力作であるだけに、それが突出した印象も強いが、読者の立場からは、前後の章とのつながりにもう一工夫欲しかったように感じられる。

他に、2点ほど感想を述べておきたい。1つは、本書では電気事業の発展が主に企業の供給サイドから述べられているが、戦前期に一般家庭にどのように電灯が普及していったかなどの消費の側面の記述もあれば、新しい視点からの電力業史が開拓され、生活社会史的観点からも大変興味深いものとなると思われることである。2つめは、下巻の中部電力時代は、評価を定めにくい最近の時期を対象とする制約のためか、各時期の経済社会の動向の推移を背景に手堅くまとめられているものの、上巻ほどの掘り下げた分析的記述には至らず、研究者の視点も必ずしも十分に発揮されていないように思われる。そのため、上巻と比べると、やや平板でダイナミズム感を欠く印象もまぬがれ難かった。

（中村青志）

## 優秀会社史賞 特別賞

『朝日新聞社史 明治編』同『大正・昭和戦前編』  
同『昭和戦後編』同『資料編』

朝日新聞百年史編修委員会編 朝日新聞社発行  
1995年7月 640p, 682p, 926p, 686p 23cm 索引あり

本書は、明治編、大正・昭和戦前編、昭和戦後編の3冊の本史だけで2193ページ、これに資料編1冊686ページがつく、近來の大著である。刊行方針の決定が1970年、翌年5月編纂委員会を設置し、95年7月に発行と、実に24年の歳月をかけた重量感がズッシリくる。しかも、語り口は平明で、充実した内容もあって、滞りなく読み通すことができた。

明治12(1879)年の木村騰による大阪の小新聞としての創刊に始まり、ふりがなつき・さし絵入り・艶ダネ中心の小新聞でもなく、政論重点の大新聞でもない中新聞を目標に経営を拡大していくプロセスが記述の大筋である。その流れの中に大物の記者招聘、販売網の拡充、社屋・印刷機械などへの絶えまない設備投資、東京朝日の創刊とその役割、企業形態の変化(合名一合資一株式会社)、管理機構の整備などが要領を得て書き込まれている。水準を抜き出した社史である。

これらのメリットを評価して、本書を「優秀会社史賞」に推すことは選考委員の一致した意見であった。ところが、委員会内に、本書は「優秀会社史賞」に値するが、本賞ではなく特別賞を授与すべきだという強い意見が出た。本書は、「朝日新聞社史」ではなく「朝日新聞史」ではないか、つまり内外の情勢の変化に応じたプレス・キャンペーンの記述に紙幅の大部分が注ぎこまれ、「朝日新聞」という商品を生産・販売する朝日新聞社の経営の歴史としてはやや弱いではないか、というのが主な理由であった。

これに対し、大衆向け報道紙をめざす経営戦略を中心に、前述した朝日新聞社の多様な経営活動が系統的に記述されており、たんなる「朝日新聞史」ではない、それに家電メーカーや食品メーカーが製品の変遷に過半の紙幅をさくというのは問題だが、新聞や映画演劇などの情報・教養・娯楽を供給する会社の社史に「商品」の記述が多くなるというのはやむを得ないことだ、という反論も出され、本

賞か特別賞かをめぐって意見は割れた。

しかし、朝日新聞社の経営史の重要なポイント、たとえば住友銀行との資金的関係、宅配制の維持にかかわる販売店問題、紙面の質の高さにもかかわらず「読売」に首位を奪われ続けている理由などへの言及が足りないのは「朝日新聞社史」としての欠点であり、こういう点にもっと筆を費やしてほしかったという意見では一致した。こうした議論に即して「特別賞」という結論が出されたのである。

「優秀会社史賞」に選ばれた理由は、前述した読みごたえ、読みやすさという点にも求められるが、もう1つ、社内の史実を不名誉なことでも発表するという積極的なディスクロージャーの姿勢が高く評価されたことをつけ加えておきたい。

具体的な事例は、戦前の「満州事変」勃発時の社論転換や戦後の「林彪事件」に示された中国報道のあり方である。本書によって、これらの重要なイシューについては、社内論議が激しくたたかわされていた事実を知り得た。ことに「満州事変」時の社論転換をめぐる社内の苦渋に満ちた論議の記述には感銘を受けた。もう1つは、村山家と経営陣との対立についても、率直に事実を書き記している。ただ、村山・上野両家の確執については言及されず、その代わりに村山家の人名がかなり多く登場するなどは欠点とされよう。

最後に、21世紀に向けて「朝日」は、これからも800万部を超える大衆紙であり続けるのか、クオリティ・ペーパーをめざすのか——を知りたかったが、その点は首脳部自身が迷っているのだろう。

(森川英正)

候 補 作 品 選 評

大関二百八十年史

紀陽銀行100年史

西部石油三十年史

ダイキン工業70年史

名古屋鉄道百年史

日本ガイシ75年史

日本火災海上保険株式会社百年史

フジサワ100年史

三井海上火災保険株式会社七十五年史

レンゴー株式会社八十年史 1909～1989

## 候補作品

### 『大関二百八十年史』

大関株式会社編集・発行

1996年4月 763p 22cm 索引あり

本書は本文と資料編からなり、本文は通史と部門史に分けられている。通史は、第1編「近代酒造業の史的展開——創醸期の大坂屋」と第2編「近現代酒造業の展開——今日の大関を築く」に区分され、区分の年は明治元年である。したがって、第1編は江戸時代の約150年間の記述の対象とされている。この第1編は2つの目的をもっているように思われる。その1つは日本の酒造業、とくに灘、今津の酒造業の発展を説明することであり、もう1つは前身の大坂屋の酒造業の活動を明らかにすることである。前者については「あとがき」に「大関という1企業の歩みにとどまらず、明治期以前では今津郷の歴史にも触れるようにした」と記されている。したがって、第1編の叙述は、近代（近世？）酒造業の発展、灘酒造業の発展、今津酒造業の発展を記述した後大坂屋の活動が点描される。前者は大坂屋の活動の背景を明らかにするものとも読めるが、実証的に灘酒造業の発展を説明したものとして興味深い内容である。ただ、これを別の言い方で言えば、大関（大坂屋）の企業活動に関する記述が手薄であるということにもなる。戦前の資料が焼失したことが明記されているから、資料が不足しているという制約が厳しかったことは容易に推定できるが、惜しまれるところではある。

第2編は、1992年までの大関の歴史を7つの章に分けて記述している。記述項目の順序は第1編と基本的には同じであり、日本経済の概観、酒造業の概説に続いて大関（酒造）の企業活動が述べられる。大関の企業活動に関する記述は増え、株式会社長部文治郎商店の設立、「コールド大関」「デラックス大関」「ワンカップ大関」の開発、杜氏から醸造社員へ、酒造蔵の近代化、桶買いと「大関友の会」、近促法（中小企業近代化促進法）との関係、アメリカへの進出、酒米確保策としての村米制度の盛衰などに関して興味深い叙述になっている。

部門史は経営理念、商品と販売、技術、人材という4つの章で構成され、通史

と重複する面もあるが、いくつかの意味で各章が通史、とくにその第2編を補完するものとなっている。

さて、本書の通史第1編に関しては「学術的な著作のレベルに達している」という高い評価もあった。しかし、他方で、学術的か否かは別にして、用語が大変に難解であることや、文章が、これまた大変に読みにくく、文意不明の箇所が見られること、やや時代がかった表現が多いこと、そして冗漫な印象を与えることも難点として指摘された。通史第2編は内容的には第1編より劣るが、やや読みやすい文体になっている。とくに戦後の記述はかなり読みやすいと評価された。

また、大正・昭和期（戦前）の日本経済の概観に関しては、その記述内容が研究史的には最近の成果を活用していないという印象がもたれた。

企業経営史としてみると、既述の資料の存在からみて、戦前に関して経営史の記述を期待するのは無理かもしれないが、戦後についても記述が実物ベースになったため十分な成果が挙げられていないと評価された。たとえば、戦後復興初期の概況に関して本文では「営業報告書」によりながら生産、設備の整備などが述べられるだけであるが、巻末統計によれば、高い売上高経常利益率が達成されている。この高収益が、大関復興を解く鍵を秘めているのではないかとみることできる。また、44期～55期に売上・経常利益が横這いであるが、なぜそうなのかも明らかにされてはいない。「ワンカップ大関」の開発は重要なことであるが、いかにしてそれが開発されたのか、何が当初その販売の伸びを制約したのか、その制約を解決したのは自販機の採用なのか、どのようにして自販機による販売方法を開拓したのかといったことが書かれていない点は、評者が等しく難点として指摘したところである。

（橋本寿朗）

---

## 候補作品

---

### 『紀陽銀行100年史 本編』同『資料編』

株式会社紀陽銀行編集・発行

1996年3月 675p 386p 29cm 索引あり

---

紀陽銀行の社史(80年史)は、1978(昭和53)年の第1回「優秀会社史賞」の候補作になった。紀陽銀行は、明治28年に第四十三国立銀行の子会社、紀陽貯蓄銀行として設立され、しだいに独立して大正11年に普通銀行に転換。戦中の銀行合同では県内諸行を合併・吸収し、ついに県下唯一の本店銀行となる。元貯蓄銀行が、一県一行主義の中心として生き残った例は他になく、その経緯を明らかにしたものだ。そのとき賞を逸した理由の第1は、内部資料に基づく記述の乏しいことであった。

今回、候補作となった『紀陽銀行100年史』では、本史とは別に詳細な「資料編」が編まれて、100年史としての拡充が図られていることは評価される点である。

本社史には、地方銀行史としての特色が見られ、それを優れた点の第1にあげることができる。明治以降、和歌山県下には延べ55行もの銀行が設立されたというが、昭和20年6月の紀陽銀行の紀伊貯蓄銀行合併をもって、和歌山本店銀行は紀陽銀行1行となったのである。本社史では、戦前の和歌山県における銀行合同史が詳しく記述されている。

第2に、和歌山県の経済史と産業史としての記述も詳しい。たとえば、「前史」として「銀行制度の創設と明治の和歌山」とあり、第2節「明治前期の和歌山」では、1.和歌山県の誕生と県域経済、2.和歌山県下の銀行設立、といった内容になっている。第1章以降でも、今日の紀陽銀行につらなる県下の銀行史が柱となりながら、マクロな日本経済の状況と、和歌山県の産業経済とが、ていねいに記述されている。

また、銀行内部の業務規則、労務・福利関係のこともかなり詳しく書かれている。

本社史では、紀陽銀行の経営について多くのことが記述されているが、個々の掘り下げが必ずしも十分とは思えない。多くの事柄の関係がはっきりしないために、経営の全体的な見取り図をもつことが難しいのである。他方、頭取の就任挨拶が長く引用されているなど、建前的な表現が目立った。

問題点として指摘したいことは、①意思決定のプロセスについての記述が見られないまま決定された結果が示されていること、②失敗や挫折、考え方の食い違いや対立などの記述がないこと。そのため、全般に平板な印象を与えるものになっている。そして、③分析的視点が不足していることである。

また、競争相手のことがほとんど出てこないことも、問題点として指摘することができる。地域の金融機関として紀陽銀行の地位がどのように変化してきたか、あるいは、大手の都銀、地域の信用金庫あるいは郵便局、証券会社など、さまざまな金融機関との競争がどのようなようであったか、こういったことの記述もほしかった。

社史を発行するタイミングとしては、現在は微妙な時期である。最近10年間に、バブルの発生と崩壊があり、そして今その後遺症が見られるからである。バブルの時期に、紀陽銀行がどのような経営行動をとったか、その結果抱えることになった困難な問題の解決に、現在どのような努力をしているか、本社史からはまったくといってよいほどわからない。それを紀陽銀行だけの課題とするのは当たるまいが、この時期に100年史を編んだ有数の地方銀行であるだけに、大きな期待をしたところだった。

(吉原英樹)

---

## 候補作品

---

### 『西部石油三十年史』

西部石油株式会社発行

1994年3月 359p 27cm

---

本書の「あとがき」では、次の4点を編纂方針としてあげている。

- ① 単に時系列的に羅列した経営史としないため、記述の内容が一部重複もしくは前後することがあっても、各章をテーマ別に編集する。
- ② 読まれる社史とすると同時に目で楽しめる社史を目指して、関連する写真や図表及び客観的な判断資料となる当時の新聞掲載記事を多用する。
- ③ 堅苦しさを和らげる意味で、当時の話題や逸話、秘話などを適宜挿入する。
- ④ 内容の理解に資するため、用語の解説などを随時欄外に記載する。

これらの諸方針のうち、②、③、④は、基本的には成功をおさめている。見開きの2ページ分の上段中央に本文、上段左右に用語解説、下段に写真・図表・新聞記事・逸話を配するレイアウトは、必ずしもオリジナルなものではないが、読みやすさを高めるという効果をあげている。

問題は、本書の最大の特色とも言える①の編纂方針にある。

「単に時系列的に羅列した経営史としない」ということは、積極的に解釈すれば、重要なテーマを掘り下げてメッセージ性をもった叙述を展開する、ということであろう。確かにこの点は、本書の1つの特徴となっている。創業者・竹中治の活動、石油精製業の許可取得の長期化、漁業補償交渉の難航などに光を当て、操業開始にいたる長い道程を描いた部分（第1章～第3章）は、とくにリアリティーに富み、きわめて興味深い記述と評価することができる。本書が「優秀会社史賞」の候補作品に選定されたのは、単にレイアウトがすぐれているからだけではなく、いくつかの重要テーマについて掘り下げた叙述を展開しているからでもある。

しかし、重要なテーマを掘り下げて検討するためには、「記述の内容が一部重複もしくは前後すること」が求められるわけでは、必ずしもない。本書の第3章～第5章、第5章と第6章、第7章と第8章、第9章と第10章、第12章と第13章

では、叙述時期の重複が生じ、それぞれの時期に西部石油が統合された企業として、どのように行動したかを読みとりにくくしている。会社が歩んだ30年間のプロセスをきちんと時期区分し、各時期の重要テーマを明らかにしたうえで、それらについて掘り下げた叙述を展開するという編別構成がとられていれば、ここで指摘した全体像の不明確さという難点は、取り除かれていたことであろう。

本書のもう1つの問題点は、経営情報の開示と分析が十分でないことである。通史部分に盛り込まれた図表の大半が業界全体に関するもので、西部石油プロパーのものでないことは、この点を端的に示している。

総括的に言えば、本書が石油精製業関連の会社史の平均的水準を超える秀作であることは、間違いない。ただし、これまでの「優秀会社史賞」の選定過程では『日本石油100年史』や『東燃50年史』のような、なかり高水準の会社史が候補作品には選ばれながらも受賞にはいたらなかったという経緯があり、本書がこれら2作品を上回るか否かが、「優秀会社史賞」に該当するか否かを決定する際の基準となる。この基準に照らすと、残念ながら本書は、企業経営の全体像の不明確さ、経営情報の開示・分析の不十分性という点からみて、「優秀会社史賞」を受賞する水準にまでは達していないと言わざるをえない。

(橘川武郎)

## 候補作品

### 『ダイキン工業70年史』

ダイキン工業株式会社社史編纂委員会編纂  
ダイキン工業株式会社発行  
1995年7月 1015p 27cm 索引あり

業務用エアコンのトップメーカーであるダイキン工業は、油圧機器、化学部門に多角経営をおこなっている点で、特徴ある企業である。『ダイキン工業70年史』は、創業者・山田晁の生い立ちから多角経営を展開する現状（1994年まで）に至るまでを、通史と部門史に分けて記述している。同社は、すでに『ダイキン工業50年史』を刊行しており、本書は50年史の部分を序章に簡潔にまとめ、おもに最近20年間について記述することに重点をおいている。すなわち、本書は山田稔社長時代の最近20年史である。

本書を一読した全体的な印象は、1993年までの事業展開が丹念に描かれており、経営上の問題点をいかに克服してきたかが、わかりやすく記述されている。また、部門史を別建てとして本文の半分以上のページをあてたため、事業部門別の記述が詳細であり、充実している。部門史の対象時期は1973年以降が中心であり、第1次石油危機以降の経営環境の激変のもとですすめた事業再編の内容が記述されている。とくに空調営業に重点がおかれ、3事業部制から1983年の製販分離にいたるまでの組織再編と販売網づくり、そして「全天候型経営体質」の実現を目指した1984年以降の販売活動の記述が充実している。製造面の記述は量的には少なめであるが、生産体制・製造技術と製品開発に区分され、トヨタ生産方式にならった多品種少量生産体制の構築など興味深い事実がふれられている。同社の特徴である化学部門については、事業戦略の推移と利益面での空調部門の落ち込みを補う役割、ココム違反事件への対応、フロン規制への対策など、デュポンに次ぐフッ素化学メーカーとしての事業展開を描いている。

また、防衛機器の記述も丁寧である。これまで防衛機器関係の事業については、多くの社史がふれないか、または具体的な記述の乏しいことが指摘できる。同書が、特機部門の事業内容を技術面を含めて可能な範囲で記述したことは、メリッ

トとして挙げておくべきであろう。

ただし、本書の読み方はいささか難しいところがある。すでにふれたように、本書は通史と部門史からなっている。この点については、「通史は経営戦略にそった会社全体の動きを記述し、部門史では部門の歴史を一貫して理解していただくために、重要事項についてはあえて通史との間の重複もいとわず記述いたしました」という編集方針が述べられている。もちろん、通史、部門史という区分は編集方法としてありうるし、企業によっては必要性が高いと思われる。問題は両者の記述の分担であろう。

第1に、通史編は「ビジョン60」「ビジョン65」「ビジョン95」という経営計画を軸として「会社全体の動き」が記述されているが、やはり部門編との重複が目につく。むしろ、部門史のほうが記述が詳細なので経営方針が理解しやすい面があり、通史編の印象が薄いのが気になるところである。通史編において、意思決定のプロセスにより踏み込んだ記述をおこなうなどの解決策があるのではないだろうか。

第2に、部門史は現行の組織別の記述になっている。これによって管理部門や製作所・支店部門の動向を知ることができるのだが、一方で総花的になり、経営戦略との関係をもっと意識したいところである。

第3に、営業部門に比べて生産部門の記述のウエイトが低くなっている。これは、経営戦略の重点がそこにあったことを示しているのであろうが、とくに製品開発の記述が無難にすぎる印象がある。序章のフッ素化学部門のような、開発プロセスを含めた叙述が部分的にでもほしいところである。

(長谷川 信)

## 候補作品

### 『名古屋鉄道百年史』

名古屋鉄道(株)広報宣伝部編集 名古屋鉄道株式会社発行  
1994年6月 1106p 27cm 索引あり

名古屋鉄道の前身の名古屋電気鉄道は、明治31年にわが国2番目の電気鉄道を名古屋市内で開業し、その後、市内路面電車路線を延長していった。大正元年には、郊外電鉄の分野に進出したが、大正10年に郊外線が分離独立して名古屋鉄道となり、翌年、市内線は名古屋市に移管された。

その後、名古屋鉄道は岐阜に向かって郊外路線を拡大し、昭和5年には美濃電気軌道を合併して、名古屋・岐阜間を結び、社名も名岐鉄道と改称した。ついで、昭和10年には愛知県東部に路線を展開していた愛知電気鉄道（明治45年創業）を合併した。その結果、名古屋を境に東西に二分されていた電鉄網が統合され、広い地域的基盤が確立して、社名も再び名古屋鉄道となった。戦時期には、瀬戸電気鉄道、三河鉄道などを合併し、ほぼ今日の鉄道路線網が形成された。同社は、さらにバス部門、不動産部門、観光レジャー部門などに多角経営を展開する大手私鉄企業に発展し、現在に至っている。

本書では、こうした同社の100年間の歩みが読者にわかりやすく記述されている。しかも、同社の歴史は、20社に及ぶ企業を合併統合してきた過程である。戦前期を対象とする本書の第1～4章の記述は、合併吸収された前身企業の歴史を丹念に追い、また合併などによる路線の延長拡大を明確に図示するために、多数の路線図が駆使されている。巻末の付属資料のなかにも、財務や運輸統計などの詳しい計数的資料が収録され、本書の力点が、専門研究者の協力を得ながら、明治以来の中京圏の地域発展を背景に、路線の拡大過程を詳細に記述することに置かれていると推察される。

本書の記述内容に対する注文をあげるならば、トップ・マネジメントを中心とする経営の側面が必ずしも十分に描かれていないと思えることである。戦前期に関しては、資料的制約からある程度無理があるかもしれないが、戦後期について

は十分可能であろう。例えば、第5章が扱う昭和20年代の記述をみても、昭和20年11月に結成された労働組合の活動が生き生きと描かれているのに対し、戦後の出発の重要な時期に経営側が何を考えていたのか、その影が薄いという印象を禁じえない。その後の時期においても、経営戦略の決定などについて、トップの役割が描ききれていないとの感想をもった。

また、戦後期を対象とした第5章以降の記述では、労使協議を通じての合理化の展開など労使関係の安定的展開が同社の発展を支えたことが一貫して強調されている。一般に合併を繰り返した場合、労使関係も含めて、組織の安定的統合の実現に苦慮するといわれるが、合併により成長した企業でありながら、名鉄の場合に、なぜ経営側と友好かつ安定的な関係をもった労働組合が誕生し、全社的一体化が早期に実現できたのか。残念ながらその説明はなされていない。そうした意味で、本書の戦前期と戦後期の記述内容の関係は、路線網の継承という面だけでなく、労使関係の基盤となる社風や組織風土の面でも、両時期の接続した理解への努力が図られるべきだったと思われる。また、そうであれば、他の大手私鉄企業と比較した際の同社の特色も、いっそう浮き彫りにされたはずである。なお、労使交渉事項についてはきわめて詳しい記述がなされているが、反面、鉄道事故に関する記述がやや希薄で、社外への視野がまだ十分に開かれていない印象が若干気になった。

最後に、735ページの本文に続いて、詳細な付属資料、年表、参考文献リスト、索引が付されているにもかかわらず、巻末に「編纂後記」ないし「あとがき」がないことが、やや奇異に感じられたことを指摘しておきたい。一般に社史の「あとがき」には、編纂の実務担当者の立場から、編纂の基本方針、編纂開始から刊行までに要した期間、執筆分担、資料収集その他の編纂過程での苦労話などが凝縮されて述べられており、非常に興味深い。社史の担当者も自社の社史の編纂方針を企画構想するにあたり、まず他社の社史の「あとがき」を読んでみるといわれている。本書の場合も、「あとがき」で編纂方針や編纂の具体的経過などを教えてほしかった。

(中村青志)

---

## 候補作品

---

### 『日本ガイシ75年史』

財団法人日本経営史研究所編集 日本ガイシ株式会社発行  
1995年3月 743p 27cm 索引あり

---

本史を通読した読者の多くは、オーソドックスな構成と内容を備えた手堅い社史であるとの印象をもつであろう。時代区分、各章の構成、記述のスタイル、付属資料など、いずれの点でも手堅く、かつバランス良くまとめられている。企業成長の過程を、特定個人のリーダーシップというような要因で説明することは極力避けて、可能な限り客観的な諸条件と、それに対する経営者の認識に則して説明するという方法がとられている。おそらく、75年の間に生じた経営上の重要問題は、ほとんどもれなく正確に記述されていると考えてよいであろう。

そのような意味で、この社史は安心して読むことができる。しかも、この企業の行動のパターンが戦前と戦後で、大きく変化したという興味深い事実も読みとることができる。すなわち、戦前の日本ガイシは、トンネル窯の建設の遅延に見られるように、設備投資には慎重であり、競争企業に対しては基本的には協調姿勢をとり、森村グループの一社一業主義に従って、点火プラグのような新分野は分離独立させた。これに対して、戦後の日本ガイシは、日本一を目指し、それを達成すると、直ちに世界一を目指すというように極めて強い成長志向をもった企業に変身している。積極的に設備に資本を投下し、競争も回避しない。さらに、1954年には野淵社長は、「6：4構想」によって、非ガイシ分野への多角化に乗り出して成功を収めているのである。

このように企業行動が変化していることを読み取った読者は、当然ながら次には、その理由が知りたくなる。しかし、この社史はこのような読者の希望に十分には答えてくれない。戦前の行動パターンについては、トンネル窯建設の遅延理由についてはやや説明不足のように思われるが、森村グループの特徴として行き届いた説明が与えられている。一社一業という方針も、分社化と考えれば、今日でも盛んに行われている施策として理解することができる。これに対して、戦後

の企業行動の変化の背景や直接的な原因の説明は十分とはいえない。戦後ほどなく、日本ガイシは競争企業をはるかに引き離れたトップ企業となった。その理由は、主として同業他社の経営の失敗によると極めて簡単な説明が与えられているにすぎず、これでは大方の読者は満足しないであろう。

こうして日本のトップになった日本ガイシは、直ちに世界一を目指し、短期間にそれを実現した。そのきっかけはアメリカ向けの大型輸出商談を獲得したことであったとされている。このプロジェクトには、アメリカの国内産業保護の観点から、外国企業にとっては極めて不利な条件がついていたという。日本ガイシがそのような不利を克服して落札することができたのは、圧倒的な価格競争力があったためとされている。しかし、1953年という早い段階で、どうして日本ガイシがそのような価格競争力をもつに至っていたのであろうか。あるいは、日本ガイシは戦前の段階で、すでに国際水準を抜く実力を蓄えていたのであろうか。いずれにしても、この国際競争力の源泉について、丁寧な説明なり分析が必要であろう。

経営の多角化は、特殊な経営戦略ではない。しかし、この企業は戦前は一社一業主義の企業であったのであるから、これは大きな方針転換であったといわねばならない。したがって「6：4構想」の決定過程については、詳しい説明が必要であろう。もちろん、戦後の経営陣にはかつての一社一業主義のことなど、まったく念頭になかった可能性もある。しかし、仮にそうであれば、そのこと自体が戦前と戦後の断絶の検証にもなるわけである。

この社史は経済史・経営史の専門家によって書かれており、極めて手堅くまとめられた優れた社史である。文章も平明で、ガイシという一般にはあまり馴染みのない製品については、欄外で簡単な解説をするなどの工夫が施されているのも、社外の一般読者には有り難い。しかし、重要な出来事について掘り下げた説明が不足している箇所が散見されるのが惜しまれるのである。

(大東英祐)

## 候補作品

### 『日本火災海上保険株式会社百年史』

財団法人日本経営史研究所編集  
日本火災海上保険株式会社発行  
1995年12月 932p 27cm 索引あり

日本火災海上保険株式会社は、3つの前身会社をもつ。それは日本火災保険株式会社と日本海上保険株式会社および帝国火災保険株式会社の3社である。本書はそれら3社の創立から、現在に至る100年をフォローした社史である。

これらの前身会社は、もともと複数の企業家の共同出資で作られた。日本火災は大阪の企業家たちが創設したものであり、日本海上は社外船主たちの手によって作られた。また、帝国火災も東京の実業家や有力者たちの共同出資であった。つまり、いずれも単一の巨大な資本の背景をもっていたわけではなかった。それゆえに、これら3社の経営の過程は平坦ではなかった。その後、日本火災と帝国火災は安田財閥に続く金融企業集団を構築した東京川崎家の系列に入り、また日本海上は社外船主の一方の雄であった右近家が中心株主となり、その経営の下におかれるようになるが、東京海上や大正海上（現三井海上）のような、いわゆる財閥系損保会社のような幅広い関連会社をもっていないために、その展開も限られざるを得なかったのである。それは戦後も同様で、同社の展開を叙述した各所で、「非財閥系損保会社」という言葉が使われているところからも明らかである。いわば、これが同社の経営の展開を語った本書のライトモチーフとなっていると見てよい。とりわけ、戦後ではそうした限界の中で、同社が「大手損保」の地位をいかに維持し、いかに上昇させようとしたのかを描こうとしている。

本書は、全体を10の時期に分け、各期における日本経済の状況と保険業界の推移を明らかにした上で、自社の経営のあり方を、組織の変化と経営方針や戦略の推移、営業状況、資産運用の状況の順で描いていくという形を一貫して通しており、構成はしっかりしている。また、例えば昭和30年代初頭に起こった内部紛争とテーブルファイア事件にもかなりのページを割き、けっしてうやむやにしようとしていないし、上述のように、自社の置かれている状況も的確に把握しようと

しており、こうした社史刊行への取り組み方には好感がもてる。

ただ、いくつかの難点がこの社史にはある。その1つは同社のというよりも、保険会社の社史のもつ宿命と言った方がよいのであろう。この産業の社史は生保でも損保でも、とにかく膨大な統計の上にたって営業状況や資産運用の分析が機械的に行われがちで、それがその社史を一体に読みにくくする原因となっているが、本書もその例外ではないことである。例えば営業で言えば、各商品の伸びやシェアが各時期区分ごとに分析・叙述され、ついで業績や資産運用も同じ形で論じられていく。確かに、それがこの産業の性格と言えればそれまでであるが、それにしても本書はこの部分がやや機械的で、他社との比較も十分行われておらず、分析が事業報告書の域を越えていないことが気になる。そのため、各時期のそれぞれの分野での状況はある程度わかるものの、それを経営の流れとつなげて把握しにくくなっているのである。例えば、自動車保険は昭和30年代初頭に引き受け規制が強化され、その結果、同社のマーケットシェアが低下するが、そうした経営方針とその結果は、他社と比較してどのように位置づけられるのか、その点が明確ではない。このほか、同社株式の移動に伴う経営状況への変化や資産運用など、全般的にもう少し掘り下げた分析が必要であったように思われるのである。

また、戦前部分についても、本書にはやや不満が残る。まず、第1に戦前部分に割り当てられている量が少ないこと自体が気になるが、それと同時に、戦前の場合、前身3社の展開が4つの時期区分の中で論じられ、戦後と同じような形で、各社ごとに各時期の営業、資産、業績などが叙述されていくため、各社の経営の動きが非常に読みとりにくくなっている点も問題であろう。この3社は性格的にはかなり違っており、経営の動向もかなり異なっているから、思いきって各社ごとに通史を並べたほうがわかりやすかったかもしれない。それと戦前部分では、日本火災の設立メンバーの1人で、大蔵省を経て経済界に入った外山脩三を伝統的町人の代表とするなど、いくつかの誤解があるのも気になる。

なお、本書では巻末にほぼ140ページもの膨大な資料編がつけられている。これは単なる財務諸表だけでなく、種目別の事業成績表も付されており、内容が濃い資料編であるが、1つ難をいえば、本書では前身会社の財務諸表がない点である。これが付されていれば、この部分の価値はより高まったものと思われる。

(柴 孝夫)

## 候補作品

### 『フジサワ100年史』

藤沢薬品工業株式会社編集・発行  
1995年3月 618p 29cm 索引あり

本書は、明治7年に8歳の少年だった藤森友吉（のちの藤沢友吉）が、9歳年上のいとこに伴われて大阪の薬種商に奉公に出るために故郷を離れるところから筆を起し、少年が後に設立した藤沢商店が、日本経済や製薬業界の激動の波にもまれながら、日本の代表的医薬品メーカーの1つに成長するまでの100年の歴史を、広い範囲から収集した資料の克明な吟味・検討を踏まえ、そこで見いだされた事実に即して、一定の方針のもとにバランスよく記述している。その点で、本書は「優秀会社史賞」の候補作品となる資格を十分に備えていると評価できる。

それとともに、本書が、全体として製品史を中心とするという特徴を明確に有していることも、評価すべき点である。戦前における精製樟脳、プルトーゼ（補血強壯増進剤）、マクニン（回虫駆除剤）、戦後におけるチオクタン（肝臓保健薬）、ノイピタ（活性持続型ビタミン剤）、セファメジン（抗生物質）などを中心とする製品の開発・拡販の過程についての克明な記述は優れており、資料として収録されている「製商品年表・製商品ノート」も、日本の製薬業史への貴重な貢献である。そしてこれは、製品史に記述の重点を置いた本書の編集・執筆の方針に対応している。

また、本書が社内の人たちの手による「手作り」のものであることも評価したい。外部の専門家の助けを得て、できるだけ客観的で、学問的にも価値のある社史を作るというのも社史編纂の1つの有力な方法であるが、それと並んで、社内の力を結集して自力で優れた社史の刊行を目指すという道も存在し得るはずであり、本書は、まさにこのような方向での可能性を示してくれたといえる。

しかし、その価値を高く評価した上で、なお本書について、全体として何を強調点として浮かび上がらせるかが必ずしも明確でなく、そのために読みにくくなっているという問題点を指摘せざるを得ない。

年長のいとこと2人で故郷を離れた友吉は、道修町での薬種商での奉公を経て、自ら藤沢商店を興して「特殊薬業」商人から製薬業者に転じ、昭和初年には、全国でも有数の高額所得者になるのであるが、藤沢友吉がこの時期に高額所得者であったという事実は、社内では自明の前提であるのか、本書はこの点についてまったく触れていない。もし、この事実に着目すれば、藤沢商店がこのように急成長し得たのはなぜか、という問いを軸にして、その成長の軌跡を経営史的に描くという手法が、本書の製品史的アプローチと組み合わせてとられ、それによって同商店の経営体としての発展の歴史が、より明確に描かれ得たはずである。資産家や高額所得者や多額納税者の名簿、あるいは商工人名録などを利用することで、友吉の資産や所得の大きさ、あるいは藤沢商店の営業の規模について、ある程度の数字は得られるはずであるから、これらや社内的に得られる同種の資料にもとづいて、店主の資産形成や商店の規模拡大が、どの時期にどの程度進んだかを確かめることは可能だったと思われるのである。また、本書では簡単に触れられているに過ぎない「店憲」の制定や商店の法人化は、経営史的にみて重要な出来事だから、もう少し立ち入った説明がなされてしかるべきだったと思われる。

他の評者からも、「バランス良くまとまっているが、やや物足りない」「網羅的で、やや迫りに欠ける」という総括的印象が語られた上で、以下のような具体的コメントが寄せられた。

- ① 商家経営から近代的企業経営への転換のプロセスが、十分には描かれていない。
- ② 日本の病気の歴史と関連させて医薬品市場の変化をたどり、それに対する企業の対応を分析するという手法もあり得たのではないか。
- ③ 戦後における医療保健制度の整備や変化への企業の対応が、必ずしも十分には描かれていない。
- ④ 戦後の経営危機は、銀行からの金融支援によって乗り越えられたが、このことが、その後の企業経営にどのような影響をもたらしたかが触れられていない。
- ⑤ 企業の戦略分析が手薄で、とくにそのコアや基本コンセプトが何であるかが不明である。

（山崎広明）

## 候補作品

### 『三井海上火災保険株式会社七十五年史』

財団法人日本経営史研究所編集  
三井海上火災保険株式会社発行  
1996年3月 969p 27cm 索引あり

本書は、序章と9つの章で構成されている。序章「大正海上火災保険株式会社の創立」は、イギリスを中心にして損害保険事業の発祥から説き起こし、日本における損害保険事業の発生、そして三井物産の保険代理店業務の発展と自家保険の歩みを時の流れに沿って記述したうえで、第1次大戦期に生じたビジネス・チャンスをつかんで、大正海上火災が創立された経緯が述べられる。手慣れた簡潔な叙述になっている。大正海上火災株式会社の事業活動は、時期別に9つの章に分けて記述されている。編集方針が明記されていないから推定になるが、9つの章の時期区分は主として経営トップに注目して行われているようである。それは、たとえば第2章「飯沼体制と営業基盤の確立(大正14年～昭和11年)」という章の表題が、それを端的に示している。ただし、章の表題に経営トップの名前が刻まれているのは第2章だけであるが、他の章では第2節の冒頭にトップの名を刻んで「～体制……」という項が置かれているからである。

各章の内容は、損保業界の動向に関する記述を中心とした概説が第1節に置かれ、第2節がトップマネジメント、経営方針、経営組織、労使関係を中心に、場合によっては、第2章、第4章、第5章のように株主構成などにも触れられる。第3節は営業活動の記述にあてられ、外部環境を説明したのち代理店を中心に販売組織に触れ、マリン、ノンマリンに分けて記述されている。第4節は資金運用と業績になる。企業活動の記録を客観的に書き込むとすれば、規制産業で商品開発や事業多角化が強く制約されていたから、損保業界の概況、経営方針・組織、営業、資金運用の4つに区分することは妥当であろう。そして、各章各節とも必要最小限の企業経営上、逸すべからざる出来事は満遍なく書かれている。

そして、記述内容にもいくつか工夫の跡がある。まず、第1節において各章とも「業界ランキング」について、かなりページを割いて記述していることが、そ

の1つである。とくに、独自の工夫が見られるのは運用資金量ベースで「資本系統別」のシェアを検討している第1、2章である。ただ、損害保険業では整った企業別シェアに関するデータが残されているから、「資本系統別」シェアを別にして、その貢献は割引いて評価すべきかもしれない。また、第5章第2節における株式買い占めにあった事件や、第6章第2節で「N事件」といわれる経営者のスキャンダルなどを取り上げたことも評価すべきことがらとみられた。そして、企業経営上の不祥事に触れて「出来事と反省」という記述方式をとったのも工夫であろう。第3節冒頭の営業概況において建築統計、船舶建造統計、自動車生産統計などの変化を示して、保険市場の潜在的な規模の指標としているのも1つの工夫とみる意見もあった。同業他社の社史に比べて資産運用の記述が詳しく、保有有価証券、貸付先が開示されている点も評価された。

しかし、本文9章の記述は企業活動の「乾いた記録」という印象が強い。とくに第7章以下がそうである。大正海上、あるいは三井海上という企業の歴史を記述することによって、書き手ないしは刊行主体は読者に何を伝えたいのかと考えてみると、その回答が読みとれない。たとえば、既述の株式買い占め事件を取り上げてみれば、何が起こったかは、もっぱら業界紙の記事の引用によって記述している。いわば世間がどのように見ていたかはわかる。しかし、大正海上の経営者やミドルはこの事態をどのように認識し、いかなる対策を講じたのかがわからない。つまり「乾いた記録」というのは、主体的な活動の記録が少ないということである。それは、肝心な点に関する、業界紙からの異様にと思えるほど頻繁で長文の引用を行っているという記述の仕方にもかかわる。たとえば、全損保との労使関係をどうするかは各社共通の難問であった。その問題は、第5章第2節5項、第6章第2節6項などで述べられている。しかし、それはほとんど完全に新聞記事の引用で叙述されている。経営者はどうしようとしていたのであるか。

また、経営理念などの記述はあるが、それとパフォーマンスとの関連がほとんど記述されていない点も問題であるとされた。端的な事例を1つだけあげれば、自動車保険で生じたシェアダウンや回復はなぜ起こったか。自動車保険には「慎重な対応が求められていたことになる」というのでは経営者不在か、意思不明の企業のように見えてしまう。そのように見てよいのであろうか。画竜点睛を欠く感を否めないのである。

(橋本寿朗)

## 候補作品

### 『レンゴー株式会社八十年史 1909～1989』

レンゴー株式会社社史編纂室編纂 レンゴー株式会社発行  
1995年4月 701p 27cm 索引あり

レンゴーの創業者・井上貞治郎の破天荒な経歴は、自伝や映画などを通じてよく知られている。レンゴーの歴史は、井上貞治郎の奮闘と立志を抜きにしては語れないことは明らかであるが、創業者の個人伝記の要素を、どこまで社史に取り入れるべきかについては、さまざまな判断があり得よう。この社史のメリットの1つは、創業者の活躍を企業の成長戦略の展開過程の中に位置づけるという形で、適切に処理されている点にある。

段ボール事業の創業の経緯、東芝の自給計画への対処、淀川工場の建設のための資金調達など、レンゴーにとって決定的な局面の処理は、ほとんど井上の独壇場であったことが具体的に説明されている。彼は、機械の完成に苦心惨憺し、直接交渉によって東芝問題を乗り切り、一部の株主の反対を押し切って大川をはじめとする製紙業界の有力者の出資協力をとりつけて、淀川工場の建設資金の調達に成功した。このような井上の活躍を書き連ねただけであれば、興味深い読み物にはなっても社史にはならない。しかし本書では、これらの出来事が井上の長期的な経営戦略の推進過程にきちんと位置づけられている。すなわち、井上の経営構想は、第1には、垂直統合戦略の推進であって、原料板紙の自給体制の確立であり、具体的には淀川工場の建設や原料パルプの輸入の推進などであった。第2は「レンゴー」という企業名からもうかがえる水平統合戦略で、各地に工場を併設した「営業所」と、それを持たない「出張所」または「駐在所」を開設し、さらには各地の既存企業を関係会社として統合することによって、全国的な供給網を構築することであった。このようなレンゴーの企業成長の過程を通じて、われわれは洋紙の生産・販売を巡って語られてきた、製紙業の歴史にはほとんど登場しない製紙業の発達史があったことを知ることができる。

レンゴーが「段ボール一筋」の路線を離れて、総合包装企業への脱皮を試み始

めたのは1970年であった。シカゴに駐在員を常駐させて、海外事業に取り組み始めたのも、1970年であったという。したがって、戦後の企業行動の記述からは、レンゴーは1970年頃までは、基本的には戦前の経営戦略の延長線上（利根川工場の建設と営業拠点網の拡充）で、成長を遂げてきたというイメージが浮かぶ。

しかし、レンゴーの経営戦略の基本が変わらなかったとしても、経済的・社会的な環境は戦前とは大きく変わった。第1は、製紙業への大企業参入の動きである。本史でも、これは「革命的な出来事であった」とされている。しかし、段ボールの需要の増加は急速で、レンゴーは原紙の自給率の低下に悩み、つねに自社抄造能力の増強に努めたことが強調されている。これは事実その通りなのだろうが、板紙、段ボール、段ボール箱という3つの部門に対する資源配分や、バランス調整の問題という観点からの説明が必要であろう。これは垂直統合型の企業にとっては、基本的な内部管理問題の1つであるからである。

第2は、労使関係ないし労務管理の問題である。レンゴーにおいては、職員・工員の区別が取り払われ、近代的な労使関係が成立したのは、1960年代の後半であったとされている。これに対して、多くの大企業では1950年代の前半までに同様な経験を終えていることを考えると、レンゴーのそれは大幅に遅れたといっただよいであろう。であるとすれば、なぜ遅れたのかが説明されねばならない。労使関係や労務管理の問題は、ある意味では極めて日常的な問題なのである。大きな労使紛争は当然取り上げねばならないが、大事件だけ取り上げればすむわけではない。

第3は、行政当局との関係の変化である。レンゴーは、石油危機後の、いわゆる構造不況法に基づく設備処理の過程では、大きな役割を演じたとされている。それまでのレンゴーは、業界組織や行政当局とは距離を置いて、独歩の行き方で成長した企業であったように思われる。このような大きな変化については、より詳細な記述や分析が欲しい。

本書はよくまとまった完成度の高い社史である。しかし、戦後の部分が戦前のそれにくらべると、やや精彩に乏しい。その理由の1つは、上記のような問題に関する記述が、事実経過の説明にとどまっていることにあるように思われる。

(大東英祐)

第1回～第10回  
優秀会社史賞入賞作品

(会社名, 50音順)

第1回 (1978年)

優秀会社史賞

- 『大塚製靴百年史』, 同『資料』 1976年1月, 1976年3月 780p, 360p 23cm  
『住友信託銀行五十年史』, 同『別巻』 1976年3月 1309p, 222p 27cm  
『第一法規出版株式会社七十年史』 1973年9月 588p 27cm  
『第四銀行百年史』 1974年5月 986p 27cm  
『東レ50年史』 1977年6月 542p 28cm  
『創業100年史』 (古河鋳業) 1976年3月 768p 27cm  
『三菱鋳業社史』 (三菱鋳業セメント) 1976年6月 1063p 27cm  
『安田保善社とその関係事業史』 1974年6月 984p 27cm

優秀会社史賞 特別賞

- 『荒川林産百年史』 (荒川化学株式会社) 1977年4月 492p 22cm  
『渋沢倉庫の80年』 (I) (II) 1977年3月 382p, 373p 21cm  
『葛進 日本車輛80年のあゆみ』 (日本車輛製造) 1977年5月 462p 30cm  
『日本陶器七十年史』 1974年12月 624p 29cm  
『三井銀行 100年のあゆみ』 1976年7月 337p 22cm

第2回 (1980年)

優秀会社史賞

- 『鹿児島銀行百年史』 1980年2月 1054p 27cm  
『グンゼ株式会社八十年史』 1978年11月 1054p 27cm  
『日揮五十年史』 1979年3月 600p 29cm  
『創業百年史』 (広島銀行) 1979年8月 1121p 29cm

優秀会社史賞 特別賞

『株式会社新井清太郎商店九十年史』 1979年11月 661p 24cm

『カゴメ八十年史』 1978年11月 632p 29cm

### 第3回 (1982年)

#### 優秀会社史賞

『東京海上火災保険株式会社百年史』上・下巻

1979年8月, 1982年3月 775p, 1033p 27cm

『富士銀行百年史』, 同『別巻』 1982年3月 1400p, 537p 27cm

『創業百年史』(北越銀行) 1980年9月 1039p 27cm

#### 優秀会社史賞 特別賞

『世界への歩み トヨタ自販30年史』, 同『資料』(トヨタ自動車販売)

1980年12月 612p, 214p 29cm

『ブリヂストンタイヤ五十年史』, 同『資料』 1982年3月 532p, 78p 22cm

『明治生命百年史』 1981年7月 405p 22cm

### 第4回 (1984年)

#### 優秀会社史賞

『西部瓦斯株式会社史』, 同『資料編』 1982年12月 807p, 182p 29cm

『住友化学工業株式会社史』 1981年10月 889p 22cm

『武田二百年史』, 同『資料編』(武田薬品工業)

1983年5月 1145p, 739p 27cm

『中國銀行五十年史』 1983年4月 1097p 29cm

『日本興業銀行七十五年史』, 同『別冊』 1982年3月 1204p, 461p 27cm

#### 優秀会社史賞 特別賞

『而至六十年史』(而至齒科工業) 1983年1月 745p 27cm

『さわやか25年 東京コカ・コーラボトリング株式会社 社史』

1983年2月 249p 29cm

『三井両替店』(三井銀行) 1983年7月 502p 22cm

### 第5回 (1986年)

#### 優秀会社史賞

『中安閑一伝』(宇部興産) 1984年10月 896p 27cm

『創業百年史』, 同『資料』(大阪商船三井船舶) 1985年7月 863p, 300p 27cm

『東急建設の二十五年史』, 同『資料編』 1985年10月 637p, 453p 23cm

『阪神電気鉄道八十年史』 1985年4月 627p 27cm

『琉球銀行三十五年史』 1985年3月 816p 27cm

#### 優秀会社史賞 特別賞

『住友銀行史 昭和五十年代のあゆみ』 1985年11月 381p 27cm

『三菱重工名古屋航空機製作所二十五年史』 1983年12月 722p 27cm

### 第6回 (1988年)

#### 優秀会社史賞

『伊予鉄道百年史』 1987年4月 1129p 27cm

『関西地方電気事業百年史』 1987年10月 999p 27cm

『百年史 東洋紡』上・下巻 1986年5月 574p, 652p 22cm

『三菱倉庫百年史』, 同『編年誌・資料』 1988年3月 721p, 315p 27cm

『めんづくり味づくり 明星食品30年の歩み』 1986年10月 657p 26cm

#### 優秀会社史賞 特別賞

『創造限りなく トヨタ自動車50年史』, 同『資料編』

1987年11月 1030p, 321p 22cm

第7回 (1990年)

優秀会社史賞

- 『朝日生命百年史』 上・下巻 1990年3月 989p, 1008p 27cm  
『東京製鋼百年史』 1989年4月 720p 27cm  
『日本アイ・ピー・エム50年史』, 別冊『コンピューター発達史-I B Mを中心にして-』,  
『情報処理産業年表』 1988年10月 575p, 307p, 363p 27cm

優秀会社史賞 特別賞

- 『創造への挑戦 豊田合成40年史』 1990年3月 400p 27cm  
『日本郵船株式会社百年史』, 別冊『同資料』, 『近代日本海運生成史料』  
1988年10月 901p, 919p, 588p 26cm

第8回 (1992年)

優秀会社史賞

- 『味をたがやす 味の素八十年史』 1990年7月 767p 27cm  
『住友別子鉱山史』 (住友金属鉱山) 上巻・下巻, 同『別巻』  
1991年5月 505p, 438p, 271p 27cm  
『セゾンの歴史 変革のダイナミズム』 上巻・下巻, 『セゾンの活動 年表・資料集』  
1991年4月, 1991年6月, 1991年11月 458p, 647p, 636p 23cm  
『日本生命百年史』 上巻・下巻, 同『資料編』  
1992年3月 773p, 654p, 639p 27cm

優秀会社史賞 特別賞

- 『セーレン百年史 新たな飛躍・新たな挑戦』 1990年11月 737p 27cm

第9回 (1994年)

優秀会社史賞

- 『花王史100年 1890~1990年』, 同『年表/資料』 1993年3月 905p, 285p 27cm  
『プロミス30年史 草創』, 同『飛躍』, 同『革新』, 同『資料・年表』, 同『付編』  
1994年2月 399p, 460p, 753p, 159p, 170p 29cm  
『丸の内百年のあゆみ 三菱地所社史』 上巻・下巻, 同『資料・年表・索引』 1993年3月  
565p, 729p, 590p 27cm

第10回 (1996年)

優秀会社史賞

- 『呉羽化学五十年史』 1995年4月 511p 27cm  
『サッポロビール120年史』 1996年3月 1009p 27cm  
『住友海上火災保険株式会社百年史』 1995年1月 1004p 27cm  
『大気社80年史 環境づくりの記録』 同『写真集』 1994年10月 629p, 191p 27cm  
『中部地方電気事業史』 上巻・下巻 (中部電力) 1995年3月 452p, 433p 29cm

優秀会社史賞 特別賞

- 『朝日新聞社史 明治編』 同『大正・昭和戦前編』 同『昭和戦後編』 同『資料編』  
1995年7月 640p, 682p, 926p, 686p 23cm